

闇の夜

なかなか止みそうもない、小言は小言を、生んで、例によつて古い落度までひき出して来る。だらだらと思ひ切り悪く、同じことを繰り返しかへして居る。それがいつも自分の寛大を有難がたせる口振りだ。それが癩に障るのかも知れぬ。榮太郎は妙にぢりぢりした心になつて、尻のそゝくれた藁草履の足をもぢつて居た。

『今日ちア——』

そこへ恰度、背負ひ籠、空樽をごろごろさせて、揚げ手拭ひの在郷女がはいつて來た。

客大切な返事を大きくして、新造が起ちあがるのを機會に、榮太郎はふらりと裏へ出た。別段何の氣もなかった。が敷石傳ひに舊の低い醤油倉の、濕っぽい風に觸れて其前を通る時、薄暗い中からヒョッコリ顔を出した倉男が、『イヨッ』と變ちきな掛け聲をして、尻を叩いて調戲つたので、例のことであるのに、今日はぐつと癩に障つた。

『馬鹿にしてやがる！』と思ふと、今までうようよして居た反感が、一時に胸に突つ張つて、榮太郎はどんな裏門を出てしまつた。

何處へといふ目當もないのに氣付いた時は、とある長家の路次をぬけて、土の硬い畑の、自然に人が横切つてつけてしまつた、道でない道に出て居た。柔い風が時々思ひ出したやうに顔を撫でて行く。その長屋の前からうそうそ随いて來た小穢らしい犬が、桑株に例のものをしかけて、諦めたやうに歸って行かうとすると、榮太郎はふと口笛を吹いてそれと呼んだ。腰から財布の麻袋を外して、その紐を長くして振り廻して見せる。中では二三枚の銀貨や銅貨が觸れてチャリチャリと鳴つた。ふと榮太郎は先刻のことを思ひ出した。

午前十時頃、伊勢屋といふ醤油屋に三十五六の目のぎよろりとした在所者風の草履ばきの男がはいつて來た。小賣りするのだとか言つて、五升樽に詰められたのを、代價は町はづれの茶屋で拂ふことにして其男は出て行つた。主人が留守の伊勢屋では、新造が自ら番號をつけて、釣錢を持たせて榮太郎に樽を擔がせてやつた。茶屋の前には一匹の馬が休んで居た。男は其馬に樽をつけてさつさとゝせてしまふ、自分は路傍に陣をとつてふかりふかり煙草を燻して居る。榮太郎はそれと向ひ合つて犬にかまつて居た。男はやがて起つて裏へ出て行つた。——男はそのまゝ歸らなかつた。その男のと思つて居た風呂敷包みも外の客が忘れて行つたのだといふことが知れた。それから一時間ばかりも過ぎてから、榮太郎は泣面をかいいて伊勢屋へ歸つて來た。

桑畑くわばたやら麥畑むぎばたやら、續いた畑の先は堤で、その下は線路になつて居る。榮太郎はその土手の草に寝轉ねころんだ。青い空は際限はてしもなく瞳に流れて、柔い、強い光りが自づと臉を射た。何處ともなく雲雀さへうが轉まわつて居る。

——ふと強く吸ふた息に、風は冷たく鼻の穴を通つた。うつすらとした寒さが肌を這ふて行く。榮太郎はばかりと目を開けた。いつか空の青みは鼠ねづの色を加へて居た。そよそよとした風が吹く。眠つたのだなといふ感じがかすかに起つた。猶投げ出したまゝの手首が冷えて居るのに氣が付く。と昔から永劫變らずこの耳について居たやうに思へて居た響きが、形になつて目の前を通る。汽車だ！ 榮太郎はむっくり起きあがつた。足がふらふらして、額を強い布きれでも縛られて居るようだ。頭腦あたまはぼうつとして居る。そのぼつとした中へ、古い、新らしい、種々さまざまの記憶が混雜ごんざになつて甦よみがつた。

『一人化物置いてんべー』

ばたばたと二三人の足音がして、踏切りを駆けぬける頭が見える。後れて小さなのが一人、泣き聲をたてながら後あとを逐おふて行く。われとわが足音に逐おひかけられて、一人後れるのは怖ろしいものだった。と思はず四邊見廻あたりしてすたすた道に出ようとした。忽ち歸るに歸られぬ苦しさが胸を打つ。たゞ漠とした反抗心に驅られて主家いへを出たので、歸らぬ積りもなかったのだけれど今となつては歸つてからの思ひが恐ろしい、歸りたい、歸りたくない……腹が空すいた。

誰しもの常とて榮太郎も堪えられぬほど父母を戀しく思つた。故郷を思へば雪の深い、軒の低い疎まばらな家々が目に泛ぶ。野袴はいた背の小さい父親の顔——大きな腹を抱へた母親の姿——遠く賣られて來る時にさうだった故せかも知れないが、母親を考へ出す度にその大きな腹が目についてならぬ。小さな草履を履いて、三里程歩いてはじめて汽車といふものを見た。赤い帶を締めた姉も一緒だった。嫂は時々傍の男に隠れるやうにして泣いて居た。榮太郎はたゞ窓から窓に入る山や川を眺めて呆氣にとられて居た。其姉は四里離れた隣の町に住んで居るといふことを聞いたそれも、懐しい。——が併しかしどうも夥おびただしく腹が空いて居る。

榮太郎はのそのそ歩いて道に出た。踏切りの番人が家では、子供を背負つた女房をんなが、今蒔しとみを下さうとしてのつそり土手から下りて來た榮太郎を透すかして見た。小さな洋燈ランプのかげに、棚の燐寸まっちやら草鞋わらじやらが見えて、晝間の賣れ残りの金鍰きんづばが、三つ四つ硝子の蓋を疊らせて居るのを見ると、榮太郎はいきなり飛び込んで二錢銅貨を投げ出した。かつかつした手許を、女は怪しんで見て居たが、言はうとして別段何も言はなかつた。

飢餓がやゝ満たされるとぶらりとまた其處を出た。

最早すっかり暮れ切つて居る。ふと振りかへつて見ると、子を背負つた人の影が表に出て、顔は此方に向ひてゐるらしい。彼は恐ろしいものにでも襲はれたやうにぶるつとして足早に歩き出した。また振りかへつて見る。影はまだ消えない。榮太郎は自分ながら自分が薄氣味悪るくなつた。で驅けるやうに灯のある方へ急いだ。がも一度振りかへつて見て、自分が怪しむ影が消えて居るのを知ると、俄に怪しい。たよりなさが犇と胸に迫つて来る。とぼとぼした自分の影を、どうかこの漲つて居る闇の中から救ひ出したい。この小さな身體を闇に吸ひ込まれやしないか？　といふやうな幽かな不安と恐怖が戰慄を呼んで、取り纏る人を求めでもするやうにあたりを見廻した。徳利をさげた髪のそゝくれた女や、魚籠をさげた裸足の人などが、通りすがりざまに顔を覗き込んでゆく。それらの人足の絶え間を見計らつて、彼はやがて柔い波を打つ麥畑に身を潜めた。

頭を抱へて何事かを考へようとして居るうちに、いつか手の平を打つこめかみや脈博に聞き入つて暫時うつとりとなる。自づと目が潤んで來た。瞼が絞つた露が冷たく頬に流れたのを感じると、泣かなければならぬ理由を発見したやうに——世の中に自分ほど可哀いさうな者はないといったやうな、感情が、後から後からと涙を湧かせた。淋しさ、情けなさ、切なさが追々と身に迫つて、胸を絞つてしんと泣いた。

『死んでくれる！』

ふと、心の底で叫んだが、聲ない聲が耳に囁いだか、

『死んでくれる！』

二度まで其言が頭腦に閃くと習慣の恐怖に累されて堪らなく戰慄して、

『死ぬ、死ぬ！』

續けてさう思つて見ると、もう泣く必要もないやうな氣がする。かすれかすれな十五年の記憶は、彼にとつてさほど未練の残る程のものではなかった。靜かに顔をあげて見ると、瞬く星がきらりと、蟠つた胸を散らして、自分にも譯のわからぬ程氣が晴々とした。

自分が死んだ後の人々の驚愕を思ふと、目的のない復讐心が勇みたつ——どうしても死ななければならぬやうな氣持になつた。けれども底には、もの哀れな、濕っぽい情緒が重く流れた。

風が行く。そよそよと風が行く。空虚になつた頭に地を搖る遠い響きが雷光のやうに傳はつた。彈かれるやうに起ちあがらうとしたが、關節の力が一度に抜けて肌にとつと粟が生つ。再び腰を起してたわつく足を踏みしめて土手を驅け下りた。人が見て居ようが見て

居まいが、あたりのものは最早目に入らぬ。頭脳は死の用意にのみ働いた。冷たい鐵道に頭を乗せて、手早く刺子の肩當てをとって顔を蔽った。もの凄いい軋りが後頭部に烈しく響く――。

番人の女房が泣く兒を賺しながら、

汚れた旗を持って柵のところに出て來た。

鐵鎖をひかうとしてふと線路を見遣つて

ぎよつとした。黒い影が横はつて居る。

猶能く透して見ると人だ。慥に人だ。

思ひ當つたやうに胸は早鐘をつく。

我にもあらず躍り込んで、

『何だ！ 何だ！ この馬鹿野郎！』

持ち合ふ旗で矢鱈につゝいた。

榮太郎はふつと飛びあがつて、

失敗つたとばかり一目散に駆け出す、

猶豫も與へず後追ふ女房の鬢づら

かすめて列車は目まぐるしく駆けた。

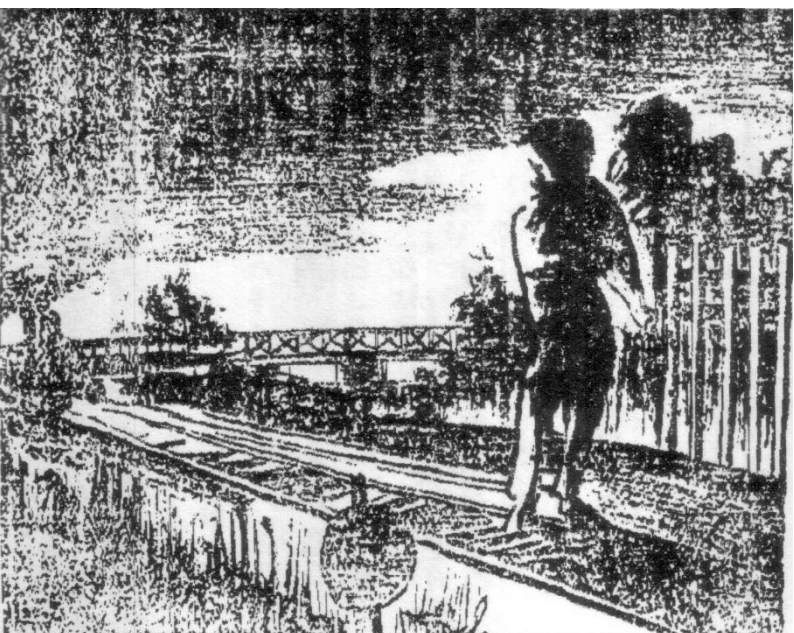
絶えだえの息つく間もあらせず、

これに後れてはとばかり、

満身の力を籠めて榮太郎は身を躍らした。

呀と思ふ間に黒い塊は、ぱつと弾かれて四五間先の闇に倒と落ちた。

取り残された女房は、暫く行手の闇を睨めて立って居たがどこまでも、事なく汽車が進むので、安心と、不安との胸を抱いて、逃げるやうに小屋に駆け込んだ。



底本…「水野仙子全集」第一卷

初出…「女子文壇」明治四十二年五月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年十月二十八日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)